

日蓮大聖人御書全集

うえのどののははごぜんごへんじ

上野殿母御前御返事

しじゅうくにちぼだい こと

（四十九日菩提の事）

新版
1905
〜
1912

うえのどののははごぜんごへんじ しじゅうくにちぼだい こと

上野殿母御前御返事（四十九日菩提の事）

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

うえののあま

弘安3年（'80）10月24日

59歳

上野尼

なんじようのこしちろうごろうどの しじゅうくにちごぼだい

おく たも

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提のために送り給う

もの につき

がもくふた

結

はくまいいちだ

いもいちだ

物の日記のこと。鵜目両ゆい・白米一駄・芋一駄・

播 豆 腐

蒟

かきひとこ

柚ごじゅうとううんぬん

すりどうふ・こんにやく・柿一籠・ゆ五十等云々。

ごぼだい おん

ほけきよういちぶ

じがげすうど

だいもくひやくせんべん

御菩提の御ために、法華経一部・自我偈数度・題目百千返、

とな たてまつ そちら お

唱え奉り候い畢わんぬ。

ほけきよう

もう

おんきよう

いちだいししょうぎよう

に

そもそも法華経と申す御経は、一代聖教には似るべく

おんきよう

ほとけ

ほとけ

と

もなき御経にて、しかも「ただ仏と仏とのみ」と説かれ

ほとけ ほとけ

知

とうがくい げ

ないし

て、仏と仏とのみこそしろしめされて、等覺已下、乃至

ぼんぷ かな

そうら

りゆうじゅぼさつ

だいろん

凡夫は叶わぬことに候え。されば、竜樹菩薩の大論には、

ほとけ い げ

しん

ほとけ

成

み

そうろう

「仏已下はただ信じて仏になるべし」と見えて候。

ほけきよう

だいし

ほつしほん

い

やくおう

いまなんじ

つ

法華經の第四の法師品に云わく「藥王よ。今汝に告ぐ。

わ と

しよきよう

きよう

なか

ほつけ

我が説くところの諸經、しかもこの經において、法華

もつと だいいち

とううんぬん

だいご

かん

い

もんじゅしり

は最も第一なり」等云々。第五の卷に云わく「文殊師利よ。

ほけきよう

しよぶつによらい

ひみつ

ぞう

しよきよう

なか

この法華經は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸經の中にお

もつと

かみ

あ

とううんぬん

だいしち

かん

い

いて最もその上に在り」等云々。第七の卷に云わく「この

ほけきよう

しよきよう

なか

もつと

法華經もまたかくのごとく、諸經の中において、最もこ

れその上なり」。かみ いまた云わく「最もこれ照明なり。もつと最も

これその尊なり」等云々。そん どううんぬんこれらの経文、きようもん わたくし ぎ私の義にあら

ず。ほとけ じようぼん そうら仏の誠言にて候えば、さだ 誤定めてよもあやまりは候わ

じ。

たみ いえ う民が家に生まれたる者、もの われ さむらい ひと「我は侍に齊し」もうなんと申せば、

かなら 科 きた必ずとが来る。もうまして「我、われ こくおう ひと国王に齊し」、すぐまして「勝れ

たり」もうなんと申せば、わ み 科我が身のとがとなるのみならず、ふ ぼ父母

と申し、もう さいし妻子といい、かなら そん必ず損ずること、たいか いえ や大火の宅を焼き、

たいぼく たお大木の倒るる時ときしようぼくとう そん小木等の損ずるがごとし。

ぶつきよう

けごん

あごん

ほうどう

はんにや

仏教もまたかくのごとく、華嚴・阿含・方等・般若・

だいにちきよう

あみだきようとう

よ

ひとびと

わ

しん

大日経・阿弥陀経等に依る人々の、我が信じたるままに、

しようれつ

わきま

わ

あみだきようとう

ほけきよう

さいとう

勝劣も弁えずして、「我が阿弥陀経等は法華経と齊等な

すぐ

もう

いちるい

ひとびと

り」はたまた「勝れたり」なんと申せば、その一類の人々

わ

きよう

讃

嬉

おも

かえ

失

は我が経をほめられうれしと思えども、還つてとがとなり

し

でし

だんな

あくどう

お

や

い

て、師も弟子も檀那も悪道に墮つること、箭を射るがごと

ほけきよう

いっさいきよう

すぐ

もう

そうろう

し。ただし、「法華経の一切経に勝れり」と申して候は

苦

かえ

だいくどく

そうろう

きようもん

くるしからず。還つて大功徳となり候。経文のごとくな

ゆえ

るが故なり。

ほけきよう

はじ

むりようぎきよう

もう

きよう

たと

この法華經の始めに無量義經と申す經おわします。譬え

だいおう

みゆき

おんとき

しようぐんぜんじん

ろうぜき

鎮

ば、大王の行幸の御時、將軍前陣して狼籍をしずむるがご

むりようぎきよう

い

しじゅうよねん

しんじつ

とし。その無量義經に云わく「四十余年にはいまだ真実を

あらわ

とううんぬん

しようぐん

だいおう

てき

もの

おおゆみ

顕さず」等云々。これは、將軍が大王に敵する者を大弓を

い 払

たち

き

捨

もつて射はらい、また太刀をもつて切りすつるがごとし。

けこんぎよう

よ

けんこんしゅう

あこんきよう

りつそうとう

かんぎよう

ねんぶつしやとう

華嚴經を読む華嚴宗、阿含經の律僧等、觀經の念佛者等、

だいにちきよう

しんこんしとう

もの

ほけきよう

従

責

大日經の真言師等の者どもが法華經にしたがわぬをせめ

靡

りけん

ちよくせん

たと

さだとう

よいいえ

せ

きよもり

なびかす利劍の勅宣なり。譬えば、貞任を義家が責め、清盛

よりと

う う

むりようぎきよう

しじゅうよねん

もん

を頼朝の打ち失せしがごとし。無量義經の「四十余年」の文

は、不動明王の劍索、愛染明王の弓箭なり。

こなんじようのころうどの

しで

やまさんず

かわこ

たま

とき

故南条五郎殿の、死出の山・三途の河を越し給わん時、

ぼんのう

さんぞく

ざいごう

かいぞく

しず

ことゆえ

りようぜんじようど

まい

煩惱の山賊、罪業の海賊を静めて、事故なく靈山浄土へ参

たも

おんとも

つわもの

むりようぎきよう

しじゅうよねん

らせ給うべき御供の兵者は、無量義經の「四十余年にはい

しんじつ

あらわ

もん

まだ真実を顕さず」の文ぞかし。

ほけきようだいいち

かん

ほうべんぼん

い

せそん

ほうひき

法華經第一の卷の方便品に云わく「世尊は法久しくして

のち

かなら

まさ

しんじつ

と

い

しようじき

後、要ず当に真実を説きたもうべし」。また云わく「正直

ほうべん

す

むじようどう

と

うんぬん

だいご

かん

に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」云々。第五の卷に

い

けちゆう

みようじゆ

い

ひと

おう

云わく「ただ髻中の明珠のみ」。また云わく「独り王の

ちようじよう

ひと

たまあ

い

か

ごうりき

頂上にのみこの一つの珠有り」。また云わく「彼の強力の

おう ひさ

みようじゆ

まも

いますなわ

あた

王の久しく明珠を護れるに、今乃ちこれを与うるがごと

とううんぬん

もん

こころ

にほんこく

いつさいきよう

渡

しちせん

し」等云々。文の心は、日本国に一切経わたれり。七千

さんびやくくじゆうくかん

かれがれ

きようぎよう

みな

ほけきよう

けんぞく

三百九十九卷なり。彼々の経々は皆、法華経の眷属なり。

れい

にほんこく

なんによ

かず

しじゆうくおくくまんしせんはつびやくくにじゆうはちにん

例せば、日本国の男女の数、四十九億九万四千八百二十八人

そちら

みな

いちにん

こくおう

けにん

候えども、皆、一人の国王の家人たるがごとし。

いつさいきよう

こころ

ぐち

によにん

いちじ

こころ得

一切経の心は、愚癡の女人なんどのただ一時に心うべ

様

だいとう

組

そうろう

ざいもく

ほか

きようは、たとえば大塔をくみ候には、まず材木より外に、

あししろ もう

おお

しょうぼく

あつ

いちじようにじよう

結

上

足代と申して多くの小木を集め、一丈二丈ばかりゆいあ

そうろう

結 上

ざいもく

だいとう

組 上

げ 候なり。かくゆいあげて、材木をもつて大塔をくみあげ

そうら

かえ

あししろ

き

す

だいとう

そうろう

あししろ

候いつれば、返つて足代を切り捨て、大塔は 候なり。足代

もう

いつさいきよう

だいとう

もう

ほけきよう

ほとけ

と申すは一切経なり、大塔と申すは法華経なり。 仏

いつさいきよう

と

たま

ほけきよう

と

たま

一切経を説き給いしことは、法華経を説かせ給わんための

あししろ

足代なり。

しょうじき

ほうべん

す

もう

ほけきよう

しん

ひと

「正直に方便を捨つ」と申して、法華経を信ずる人は、

あみだきようとう

な

む あみだぶつ

だいにちきようとう

しんごんしゅう

あごんぎようとう

阿弥陀経等の南無阿弥陀仏、大日経等の真言宗、阿含経等

りつしゅう

にひやくごじつかいとう

き

捨

なげう

ほけきよう

の律宗の二百五十戒等を切りすて抛つてのち、法華経を

たも

そうろう

だいとう

組

あししろたいせつ

ば持ち 候なり。大塔をくまんがためには足代大切なれど

だいたう 組 上 あししろ き お しょうじき

も、大塔をくみあげぬれば、足代を切り落とすなり。「正直

ほうべん す もう もん こころ あししろ とう しゅつたい

に方便を捨つ」と申す文の心これなり。足代より塔は出来

そうら とう す あししろ 拝 ひと いま よ

して候えども、塔を捨てて足代をおがむ人なし。今の世の

どうしんじやとう いっこう なむ あみだぶつ とな いっしょう 過

道心者等、一向に南無阿弥陀仏と唱えて一生をすごし、

なんみようほうれんげきよう いっぺん とな ひとびと だいとう 捨 あししろ

南無妙法蓮華経と一返も唱えぬ人々は、大塔をすてて足代

拝 ひとびと せけん 賢 果 無 ひと もう

をおがむ人々なり。世間に「かしこくはかなき人」と申す

はこれなり。

こしちろうごろうどの とうせい にほんこく ひとびと 似 たま

故七郎五郎殿は、当世の日本国の人々にはにさせ給わず、

幼 こころ かしこ ちち あと 追 おんとし

おさなき心なれども、賢き父の跡をおい、御年いまだ

はたちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華經と唱えさせ給いて

ほとけ

成

たま

ひと

じようぶつ

仏にならせ給いぬ。「一りとして成仏せざることなけん」

こ

ねが

ひも

わ

こ

こい

おぼ

はこれなり。乞い願わくは、悲母、我が子を恋しく思しめ

たま

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

こなんじよう

し給いなば、南無妙法蓮華經と唱えさせ給いて、故南条

どの

こころうどの

いっしょ

う

ねが

たま

たね

殿・故五郎殿と一所に生まれんと願わせ給え。一つ種は一

たね

べつ

たね

べつ

たね

おな

みようほうれんげきよう

たね

こころ

孕

つ種、別の種は別の種、同じ妙法蓮華經の種を心にはらま

たま

おな

みようほうれんげきよう

くに

う

たも

せ給いなば、同じ妙法蓮華經の国へ生まれさせ給うべし。

さんにん

かお

並

たま

とき

おんよろこ

嬉

三人、面をならべさせ給わん時、御悦びいかがうれしく

思

おぼしめすべきや。

ほけきよう

ひら

はいけんつかまつ

そうら

によらい

そもそも、この法華経を開いて拝見仕り候えば、「如来

すなわ

ころも

おお

たほう

は則ちために衣をもつてこれを覆いたもう。また他方の

げん いま しょうぶつ

ごねん

とううんぬん

現に在す諸仏の護念したもうところとならん」等云々。

きようもん こころ

とうざいなんぼく

はつぼう

さんぜんだいせんせかい

ほか

経文の心は、東西南北・八方ならびに三千大千世界の外、

しひやくまんおくな ゆた

こくど

じつぼう

しょうぶつ

簇

々

じゅうまん

四百万億那由他の国土に、十方の諸仏ぞくぞくと充滿せさ

たも

てん

ほし

ち

とうま

な

い

せ給う。天には星のごとく、地には稻麻のように並み居さ

たま

ほけきよう

ぎようじや

しゅご

たも

たと

だいおう

せ給い、法華経の行者を守護せさせ給うこと、譬えば大王

たいし

もろもろ

しんげ

しゅご

してんのういちるい

の太子を諸の臣下の守護するがごとし。ただ四天王一類

守

たま

忝

そうろう

いつさい

してんのう

のまぼり給わんことのかたじけなく候に、一切の四天王、

いっさい しょうしゆく いっさい にちがつ たいしやく ぼんでんとう しゆく たも

一切の星宿、一切の日月、帝釈・梵天等の守護せさせ給

た うえ いっさい にじよう いっさい ぼさつ

うに足るべきことなり。その上、一切の二乗、一切の菩薩、

とそつないん みろくぼさつ からだせん じぞう ふだらくせん かんぜおん

兜率内院の弥勒菩薩、迦羅陀山の地藏、補陀落山の觀世音、

しょうりようせん もんじゆしりぼさつとう おのおのけんぞく ぐそく ほけきよう

清涼山の文殊師利菩薩等、各々眷属を具足して法華經の

ぎようじや しゆくご たま た そうろう

行者を守護せさせ給うに足るべきことに候に、また

忝 しやか たほう じつぽう しよぶつ 手 自

かたじけなくも、釈迦・多宝・十方の諸仏の、てずからみずか

きた たま ちゆうやじゆう に とき まも たま

ら来り給いて、昼夜十二時に守らせ給わんことの

忝 もう

かたじけなさ、申すばかりなし。

おんきよう こごろうどの ごしんよう ほとけ

かかるめでたき御經を故五郎殿は御信用ありて仏にな

たま

きよう

しじゅうくにち

たま

いっさい

しよぶつ

らせ給いて、今日は四十九日にならせ給えば、一切の諸仏、

りようぜんじようど

あつ

たま

て

据

靈山浄土に集まらせ給いて、あるいは手にすえ、あるいは

いただき

摩

抱

よろこ

つき

はじ

頂をなで、あるいはいただき、あるいは悦び、月の始めて

い

はな

はじ

咲

あい

出でたるがごとく、花の始めてさけるがごとく、いかに愛し

たも

まいらせ給うらん。

さんぜじつぼう

しよぶつ

強

そもそも、いかなれば三世十方の諸仏はあながちにこの

ほけきよう

まも

たも

かんが

そうら

どうり

そうら

法華經をば守らせ給うと勘えて候えば、道理にて候いけ

ほけきよう

もう

さんぜじつぼう

しよぶつ

ふぼ

乳

母

るぞ。法華經と申すは、三世十方の諸仏の父母なり、めのと

しゆ

蛙

もう

むし

はは

こえ

なり、主にてましましけるぞや。かえると申す虫は母の音を

じき はは こえ き

しょうちよう

迦羅求羅

食とす。母の声を聞かざれば生長することなし。からぐら

もう むし かぜ じき

かぜふ

しょうちよう

うお みず

と申す虫は風を食とす。風吹かざれば生長せず。魚は水を

頼 とり き 住 処

ほとけ

たのみ、鳥は木をすみかとす。仏もまたかくのごとく、

ほけきよう いのち じき

たも

うお みず

法華経を命とし、食とし、すみかとし給うなり。魚は水に

住 ほとけ きよう

たも

とり き

ほとけ

すむ。仏はこの経にすみ給う。鳥は木にすむ。仏はこの

きよう たも つき みず

宿

ほとけ

きよう

たも

経にすみ給う。月は水にやどる。仏はこの経にやどり給

きよう くに ほとけ

おんこころえ

う。この経なき国には仏ましますことなしと御心得ある

そつろ

べく候。

こしやく りんだおう もう おう

なんえんぶだい しゆ

古昔、輪陀王と申せし王おわしき。南閻浮提の主なり。

この王はなにをか供御とし給いしと尋ぬれば、白馬の

嘶

き

じき

たも

おう

はくば

嘶

いなくを聞いて食とし給う。この王は、白馬のいななけ

とし

わか

いろ

さか

たましい

潔

ちから

強

ば年も若くなり、色も盛んに、魂もいさぎよく、力もつよ

まつりごと

あき

ゆえ

くに

はくば

おお

く、また政事も明らかなり。故に、その国には白馬を多く

集

か

たと

ぎおう

もう

おう

つる

おお

あつめ、飼いしなり。譬えば、魏王と申せし王の鶴を多く

とくそうこうてい

蜚

あい

はくば

嘶

あつめ、徳宗皇帝のほたるを愛せしがごとし。白馬のいなな

はくちよう

な

ゆえ

はくちよう

くことは、また白鳥の鳴きし故なり。さればまた、白鳥を

おお

あつ

多く集めしなり。

とき

はくちようみな失

はくば

嘶

ある時、いかんがしけん、白鳥皆うせて白馬いなかざ

だいおう

くご絶

さか

はな

つゆ

萎

りしかば、大王、供御たえて、盛んなる花の露にしおれし

まんげつ

くも

覆

おうすで

がごとく、満月の雲におおわれたるがごとし。この王既に

隠

たま

きさき

たいし

だいじん

いっこく

みなはは

かくれさせ給わんとせしかば、后・太子・大臣・一国、皆母

わか

こ

みないろ

失

なみだ

そで

帯

に別れたる子のごとく、皆色をうしないで涙を袖におびた

り。いかんせん、いかんせん。

くに

げどうおお

とうじ

ぜんしゅう

ねんぶつしや

しんごんし

りつそう

その国に外道多し。当時の禅宗・念仏者・真言師・律僧

とう

ほとけ

でし

あ

とうじ

ほつけしゅう

ひとびと

等のごとし。また仏の弟子も有り。当時の法華宗の人々の

なかあ

すいか

こ

えつ

に

だいおう

ごとし。中悪しきこと水火なり。胡と越とに似たり。大王、

ちよくせん

くだ

い

いっさい

げどう

うま

嘶

勅宣を下して云わく「一切の外道この馬をいななかせば、

ぶつきよう うしな いっこう げどう しん しまてん たいしゃく うやま
仏教を失つて一向に外道を信ぜんこと諸天の帝釈を敬

うがごとくならん。 仏弟子この馬をいなかせば、一切の
いっさい

げどう くび き ぶつでし うま 嘶 ぶつでし 付
外道の頸を切り、その所をうばい取つて仏弟子につくべし」

うんぬん げどう いろ 失 ぶつでし なげ 合
と云々。 外道も色をうしない、 仏弟子も歎きあえり。

果 しかれども、さてはつべきことならねば、 外道は先に七日
さき しちにち

おこな はくちよう きた はくば 嘶 のちしちにち
を行いき。 白鳥も来らず、 白馬もいなかず。 後七日を

ぶつでし わた いの めみよう もう しょうぞういちにん
仏弟子に渡して祈らせしに、 馬鳴と申す小僧一人あり。

しよぶつ ごほんぞん たも ほけきよう しちにちいの
諸仏の御本尊とし給う法華経をもつて七日祈りしかば、

はくちようだんじよう と きた とり ひとこえな ひとつま ひとつえ
白鳥壇上に飛び来る。この鳥、一声鳴きしかば、一馬、一声

嘶 だいおう うま こえ き やまい ところ 起 たも きささき

いなく。大王は馬の声を聞いて病の牀よりおき給う。后

はじ しよにん めめよう む らいはい はくちよう いち

より始めて諸人、馬鳴に向かつて礼拝をなす。白鳥、一・

に さんないしじゆう ひやく せんしゅつたい こくちゆう じゅうまん はくば

二・三乃至十・百・千出来して国中に充滿せり。白馬

嘶 ひとうまふたうまないしひやく せん はくば 嘶

しきりにいなき、一馬二馬乃至百・千の白馬いなきし

だいおう こえ き めんぼう さんじゆう こころ

かば、大王この音を聞こしめし、面貌は三十ばかり、心は

ひ あき まつりごとしようじき てん かんろ 降

日のごとく明らかに、政 正直なりしかば、天より甘露ふ

くだ ちよくふうばんみん 靡 むりようひやくさい よ おさ たま

り下り、勅風万民をなびかして、無量百歳、代を治め給い

き。

ほとけ たほうぶつ もう ほとけ きよう

仏もまたかくのごとく、多宝仏と申す仏は、この経に

たま

こにゆうめつ

きよう

読

よ

しゅつげん

たも

あい給わざれば御入滅、この経をよむ代には出現し給う。

しゃかぶつ

じつぽう

しよぶつ

ふしぎ

釈迦仏・十方の諸仏もまたまたかくのごとし。かかる不思議

とく

きよう

きよう

たも

ひと

の徳まします経なれば、この経を持つ人をば、いかでか

てんしやうだいじん

はちまんだいぼさつ

ふじせんげんだいぼさつ捨

たも

天照太神・八幡大菩薩・富士千眼大菩薩すてさせ給うべき

頼

きよう

怨

くに

と、たのもしきことなり。またこの経にあだをなす国をば、

しやうじき

いの

そうら

かなら

くに

しちなんお

いかに正直に祈り候えども、必ずその国に七難起こつて、

たこく

やぶ

ぼうこく

そうろう

たいかい

なか

たいせん

他国に破られて亡国となり候こと、大海の中の大船の

おおかせ

あ

だいかんぼつ

そうもく

か

大風に値うがごとく、大旱魃の草木を枯らすがごとしと

思

とうじ

にほんこく

祈

そうろう

にちれん

おぼしめせ。当時、日本国のいかなるいのり候とも、日蓮

いちもん

ほけきよう

ぎようじや

悔

たま

おん

が一門・法華經の行者をあなずらせ給えば、さまざまの御

祈

かな

だいもうここく

責

亡

いのり叶わずして、大蒙古国にせめられて、すでにほろび

いま

ごらん

そうろう

んとするがごとし。今も御覧ぜよ。ただかくては候まじ

みな

ほけきよう

怨

たも

ゆえ

ごしんよう

きぞ。これ皆、法華經をあだませ給う故と御信用あるべし。

こころうどの

隠

たま

すで

しじゅうくにち

むじよう

そもそも、故五郎殿かくれ給いて既に四十九日なり。無常

常

なら

打

聞

ひと

はつねの習いなれども、このことはうちきく人すら、なお

忍

況

はは

め

ひと

こころ

しのびがたし。いおうや、母となり妻となる人をや。心の

推

量

そうろう

ひと

こ

幼

ほどおしはかられて候。人の子にはおさなきもあり、

大人

醜

おとなしきもあり、みにくきもあり、かたわなるもあり、

思

おもいになるべきにや、おのこごたる上、かたわにもなし、

男 子

うえ

弓 矢

障

こころ

情

こうえのどの

さか

ゆみやにもささいなし、心もなさけあり。故上野殿には盛

とき 後

歎

あさ

こ

孕

んなりし時おくれてなげき浅からざりしに、この子をはら

産

ひ

い

みず

い

みていまださんなかりしかば、火にも入り水にも入らんと

おも

こ

へいあん

たれ

詔

み

思いに、この子すでに平安なりしかば、誰にあつらえて身

投

おも

こころ

慰

をもなぐべきと思つて、これに心をなぐさめて、この

じゅうし

ごねん

過

十四・五年はすぎぬ。

ふたり

男

子

担

いかにいかにとすべき。二人のおのこごにこそになわれ

頼

おも

そうら

ことしくがついつか

つき

くも

めと、たのもしく思い候いつるに、今年九月五日、月を雲

隠 はな かぜ 吹
にかくされ、花を風にふかせて、ゆめかゆめならざるか、

久 夢 歎 居 そうら 現
あわれひさしきゆめかなと、なげきおり候えば、うつつに

似 しじゅうくにち 馳 過 真
にて、すでに四十九日はせすぎぬ。まことならばいかんが

咲 はな 散 蕾 はな
せん、いかんがせん。さける花はちらずして、つぼめる花の

枯 老 はは 留 若 子 去
かれたる。おいたる母はとどまりて、わかきこはさりぬ。

情 無 むじよう むじよう
なさけなかりける無常かな、無常かな。

情 無 くに 厭 捨 たま こころう
かかるなさけなき国をばいといすてさせ給いて、故五郎

どの ごしんよう ほけきよう 付 たま じようじゆう ふえ
殿の御信用ありし法華経につかせ給いて、常住不壊の

霊 ぜんじようど 詣 たま 父 霊 山
りよう山浄土へまいらせさせ給え。ちちは、りようぜんに

はは　しやば　留

ふたり　ちゆうげん

まします。母は娑婆にとどまれり。二人の中間におわしま

こころうどの　こころ

思

覚

そうら

す故五郎殿の心こそおもいやられて、あわれにおぼえ候

ことおお

もう

止

そうら

お

きようきようきんげん

え。事多しと申せども、とどめ候了わんぬ。恐々謹言。

じゆうがつにじゆうよつか

にちれん

かおう

十月二十四日

日蓮

花押

うえのどののははあまごぜんごへんじ

上野殿母尼御前御返事